
ボクらは友達

てんすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクらは友達

【Nコード】

N1871A

【作者名】

てんすけ

【あらすじ】

ここは、とある小さな国。この国は周りを高い高い壁に囲まれ、降り止むことの無い雪にいずれ埋まり死んでしまう。そんな小さな国。その国の外れにある一軒の小さな小屋。その小屋に住んでいるのは、祖父母を守るため毎日まじめに狩りに出る狩人族の少年キクル。そんな、冒険とは無縁な少年キクルがある日の狩りがキツカケで大冒険に巻き込まれることに！そんなことは露知らず、いつものように獲物を売り終え、町から戻ってきたキクルだが・・・。

序章

序章

——ここはある雪に閉ざされた国。

——この国は周囲を高い高い壁に囲まれ、降り止むことの無い雪にいずれ埋まり死んでいく、ただそれだけの国。

——その国の外れにある森の中。

——人目にもつかない小さな小屋。

——ある一人の少年とその祖父母が暮らしている。

——小さい——とても小さくて今にも埋もれてしまいそうな。

——そんな小屋だ。

第一章 少年キクル（前書き）

きみのカケラのSSです。

もちろん、きみのカケラのキャラも出てきます（この回ではありません）が、ほぼオリジナルのストーリー、キャラクターです。時間軸は、きみのカケラよりほんのちよつと前、という設定です。

単行本派なので、ネタバレ要素は含まれていません。</font

>

第一章　少年キクル

第一章　少年キクル

ガチャ・・・バタン。

「じーちゃん、ばーちゃん、ただいまー。」

少年は体中についた雪を払いながら凍える口で言った。

「おかえり、キクル。寒かっただろう？ささ、こっちに来てぬくれ。」

部屋の奥から少しやせ気味の老人が笑みを浮かべながら出てきて少年を手招きした。

老人の声に促されるように少年は靴を脱ぎ捨てると、一目散にストーブのそばに駆け寄る。

「今日の町はどんな感じだったんだ？」

「ううううあつたけえー。へっへっへっ、そうだな・・・うーん、いつもと変わらなかったなあ・・・。俺、友達いないしなあ・・・。」

少年は笑いながら話した。

「・・・・・・・・そうか。・・・・そうだよな。」

「あつ、でも今日はオオカミの毛皮と肉が全部売れたんだ！これでしばらくは食べ物には困らないよ。」

「そうかそうか・・・・いつも悪いなあ、キクル。」

「いいんだよ。オレ、小さいころからじーちゃんとかばーちゃんに育てもらったでしょや？だから少しでも役に立ちたいんだ。それに今の生活が好きなんだ。」

「・・・・・・・・そうか。」

——あんな事があつたというのに・・・・、本当に強い子だな・・・・。

「・・・・・・・・ところでばーちゃんの具合はどう？」

「・・・・・・・・あつ？・・ああ、母さんなら大分落ち着いてるよ。咳も出てないようだったし・・・・。」

「・・・・・・・・。オレ、ちょっとばーちゃんの様子見てくる。」

「あ、ああ・・・・そうしなさい。」

そついつて、少年は奥の部屋へと行ってしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

誰もいない居間で老人は少年の背中をじっと見つめていた。

・・・ガラガラガラ。

「ばーちゃん、起きてる？」

そう言つて少年は部屋の扉を開けると、老婆の布団の近くに駆け寄つた。

「・・・キクルかい。・・・今日はちよつと帰るのが早かつたねえ・・・。」

布団に横になつていた老婆は体を起こし、少年の声のするほうに体を向けた。

「うん！今日は吹雪がそこまで強くなかつたから早く帰れたんだあ。」

「・・・そうかい、・・・それはよかつたねえ。」

老婆は笑みを浮かべながら答えた。

「ねえねえ、ばーちゃん、ばーちゃん。何かさあ・・・昔のお話してよ。」

少年は目を輝かせながら老婆にせがんだ。

少年の顔を見て、老婆はにっこり笑つた。

「……ふっふっふ、……いいよ。……そうだねえ……
。それじゃあの話にしようかな……。」

——昔々、あるところに吹雪に閉ざされた、小さな小さな国
がありました。

その国では、あまりの寒さに食べる物も着る物も人々の心さえも凍
りつき、体の弱い子供や年寄りには皆病気に苦しんでいました。

ある日、その国の王様はあまりの寒さと国民の苦しむ姿を見て困り
果て、仕方なく1人の兵士にこう命令しました。

「火の神様を探しに旅に出なさい。」

王様の命令通り兵士は剣を取り、たった一人の狩人と一緒に旅に出
ました。

最初のうちは2人とも意見が合わず、ケンカばかりしていました。

でも、一緒に旅をしているうちに2人はいつの間にか仲間として認
め合っていました。

兵士と狩人は度重なる困難を狩人と共に乗り越え、とうとう2人は
火の神様を見つけました。

さっそく兵士は火の神様に、国を助けるように頼みました。

すると火の神様はこう言いました。

「たくさんの雪を溶かすには大きな炎を生み出す“源”が必要なのです。“源”とはあなたの大切な人の“カケラ”です。」

兵士は迷いました。

いままで、兵士は仲間がいまませんでした。

それが、やっと狩人という仲間ができたのです。

カケラを失えば狩人は“人ではないもの”になってしまいます。

しかし、狩人は兵士に自分の“カケラ”を火の神様に差し出すように促しました。

悩み悩んだ末、兵士は涙を浮かべながら火の神様に狩人の“カケラ”を捧げました。

そして、約束どおり火の神様は、大空に大きな大きな炎の塊を放ち、その炎の塊はその国の雪も、凍っていた食べ物も着る物も人々の心もみーんな溶かしてくれました。

その後、その国の人々は暖かい世界でのんびり平和に暮らしましたとき。

めでたし、めでたし。

「……どうだった？」

「うん！とっても面白かったよ。……ねえ、……その兵士は

そのあとどうなっちゃったの？」

「・・・友達を失った兵士はその後、もう“人ではないもの”になっちゃった友達を探しに旅に出ていったんだよ。」

「・・・・・・・・そうなんだ。・・・・友達、見つかったかな・・・？」

「うん。きっと・・・・・・・・きっと、見つかったよ。」

「・・・・・・・・うん。・・・・そうだね、見つかったよね！・・・・きつと。」

「ああ。」

「ばーちゃん、・・・・・・・・ありがとう。オレすごく楽しかったよー！」

「・・・・そうかい、よかったあ。こんな、ばーさんの話でよければいつでも聞きにおいで。」

老婆は、嬉しそうにニッコリと笑った。

「あつ、そろそろオレ戻るね。・・・・おやすみばーちゃん。」

「おやすみ、キクル。」

そういつて祖母に布団をかけ直すと少年は居間に戻っていった。

——ばーちゃん、本当にうれしそうだったなあ……よかった。

——でも。

——ばーちゃん、ごめん。

——オレ、本当はばーちゃんのとてくれた話——面白くなかったんだ。

「ばーちゃんにはあの日のこと言っていないから………しよ
うがないよね。」

少年は小さく呟いた。

「じーちゃん。」

「おお、キクル。母さんの様子はどうだった？」

「うん、前より良くなった。これもじーちゃんの看病のおかげだね。」

「なに言ってるんだ、キクル。お前が毎日狩りに出て働いてくれるからじーちゃんはばーちゃんの看病できるんだぞ？・・・キクル、お前のおかげだよ・・・本当にありがとう。」

「へっへっへっへ・・・。」

少年は顔を赤らめながら鼻をかいいた。

「じゃあ、オレもう寝るね。・・・おやすみ、じーちゃん。」

「・・・ああ。おやすみ、キクル。・・・お疲れ様。」

「じーちゃんはなんだかとても申し訳なさそうに、オレに言った。」

「じーちゃんは、もう昔のように狩りはできない。」

「じーちゃんには右腕が無い。」

「じーちゃんはちょっと前に狩りで失敗して右腕を失っ

た。

——同時に生き甲斐も。

——別にじーちゃんの生き甲斐が狩りをする事だって言
ってるんじゃない。

——家族の生活を守ることが生き甲斐だったんだ。

——何もできなくなったその日から。

——じーちゃんはなんだか小さくなった。

少年は自分の部屋に戻ると、しばらく黙って窓の外のを眺めてい
た。

「……じーちゃん……ばーちゃん……。オレ……。
ガンバルからな。」

少年はポツリと呟くと、被っていた帽子を取り、敷いてあった布団

に包まった。

寒さは鋭く――少年の体を刺した。

第一章「少年キクル」（後書き）

< font size="2">全てが始めての挑戦で何もかも未熟で
すみません。

キクルはこれから一体どんな大冒険に巻き込まれるかは、まだ秘密
です。

ですがもうほぼシナリオは完成してます。

もちろん「きみのカケラ」のおなじみキャラも登場予定です！楽し
みに待っていていただけると幸いです。

あ、最後におまけなんですけど、“キクル”の名前の由来は、アイヌ
語の「マタンキクル」狩人」です。（まんまです・・・はい）

未熟ですがどうかこのSSをよろしくお願いします。 </ font

>

第二章　誰もいないこの森で

第二章　誰もいないこの森で

——少年が眠りについてからしばらく経った。

——いつの間にか吹雪は止み、辺りは静けさを取り戻していた。

——いつものように、凍えるような寒さが少年を呼び起こした。

「……………ん。……………吹雪が治まったな……………」

少年はまだ眠い体起こすと辺りを見回し、しばらくしてから布団をたたみ始めた。

（な——んか最近いつもより寒いような気がするなあ……………）

「……………さてっと。」

少年は布団をたたみ終え着替えを済ませると、いつものように居間へと向かった。

「……………じーちゃん、おはよ……………あれ……………じーちゃんもう起きてたの？」

老人は居間の薪式のストーブに薪を足しているところだった。

「おはよう、キクル。．．．なんだか眠れなくてなあ、早く起きてしまったんだよ。」

「そうなんだ．．．だいじょうぶ？」

「ああ、心配せんでええよ。」

「そう．．．でも気をつけてよ．．．結構前から町のほうでは原因不明の熱で死んじゃってる人がたくさんいるんだからね。」

「ああ、わかった．．．ありがとう。」

老人の痩せこけた顔はニツコリと笑みを浮かべた。

「ところでさ．．．吹雪も止んだし、そろそろオレ狩りに行ってくるよ。」

「．．．そうか．．．十分、気をつけて行くんだぞ。」

「うん、じゃあオレちょっと準備してくるわ。」

「ああ．．．。」

そういつて、少年は自分の部屋へと向かっていった。

——オレの部屋は、布団を敷けばいいになってしまっほど小さな部屋だ。

———なのに、なんでだろう？

———失った。

———この何も無い部屋は。

———オレにはとても広く見える。

「……………」

「……………さてっと。……………今回はいつもより多めにナイフ持っ
ていこうかな……………」

少年は掛けてあつた帽子を被ると部屋をあとにした。

———オレたちの生活はいつも吹雪の有無で決まる。

———言い忘れていたが、オレたちの生活には“時間”というも
のが存在しない。

———遠い昔———。

———オレたちのおじーさんのおじーさんのおじーさんの……………

そのまたおじーさんのころは“時間”というものがあって、それに従って生活していたらしい。

——オレはそんな“時間”という物に“縛られていた”おじーさんたちをかわいそうに思う。

——オレたちは自然の中で——とても苦しくて苦しくて——小さくて。

——でも。

——少なくとも、“生きたい”という自分の気持ちに従って生きている。

——オレたちは時間の中を生きているんじゃない。

——オレたちの中を時間が生きている。

——オレたちみんながいるから。

——オレたちの時間がある。

——きつと、おじーさんたちの知らない——“何か”を。

——オレたちは持っている。

——そんな気がするんだ。

——そして“あの時”。

——きつと。

——オレは“時間”を失ったんだ。

「・・・じーちゃん、それじゃそろそろ行くよ。」

「ああ・・・気をつけてな。・・・ん！？キクル、ちょっと待て！」

老人は少年を慌てて引き止めた。

「ん？どーかしたの、じーちゃん？」

「どうかしたのって・・・お前、銃はどうしたんだ？」

少年は少し間を置いて言った。

「ああ、町で弾を買おうと思ったんだけど・・・全部売り切れてて買えなかったんだ。」

「買えなかったって・・・、まさかキクル、お前ナイフだけで狩りするつもりなのか！？」

「うん。」

少年は平然とそう答えた。

「うんって……、お前なあ……。森でどんな猛獣に会ったか分からないんだぞ!？」

老人は血相を変えて少年に言い放った。

「大丈夫だよ……。じーちゃん。オレ、もう……。強く
なったから。」

「……。だからって……。」

「猛獣なんて……。別に何とも思わないよ。」

「キ、キクル……。」

老人は何か言いたそうに口を開こうとした。

しかし、少年の言葉はそれを遮った。

「それに、もし襲ってきても……。」

「殺せばいいだけでしょや?……。オレ嫌いなんだ、猛獣。」

「……………」

「そんじゃ、いつてくるわ。．．．ごめんね、じーちゃん。別にじーちゃんに怒ってるわけじゃないからね。」

「キクル．．．じーちゃんは．．．じーちゃんはな．．。」

「じーちゃん、．．．心配してくれるのは嬉しいんだけど。．．．本当に大丈夫だから。」

「あ．．．．．。」

少年はそう言い残すと、小屋を出ていった。

「キクル、．．．．まだ“あの日”のことを．．．．。」

「．．．．．。」

老人は少しの間、玄関の戸を見つめていた

しばらくして奥の部屋から声が聞こえた。

「．．．とーさんや、．．．ちよつと．．．薬を取ってきてくれませんか？」

「．．．おお、分かった。．．．ちよつと待つとね、母さん。」

そういつて、老人は薬箱を開けた。

「ん？・・・こんなにこの薬残ってたか・・・？」

—— “町で弾を買おうと思ったんだけど・・・全部売り切れてて買えなかったんだ。”

「・・・・・・・・・・あのバカ。」

「・・・・・・・・・・とーさんや、・・・まだかい？」

「・・・・・・・・・・ああ、すまんすまん、今行く。」

老人はそう答えると、何も無い天井を見つめながらポツリと呟いた。

「・・・・・・・・・・キクルも“あいつ”に似てきたな。・・・・・・・・・・“あいつ”同じで無鉄砲で・・・自分で何でも背負い込んで平気な顔して振舞ってるところがな。・・・・・・・・・・唯一“あいつ”違うのは、狩りの才能があるって事くらいか・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・キクルが変わったのも“あの日”からだっただけ・・・・・・・・・・。」

そういつて、老人は奥の部屋へと向かった。

—— 小屋の外は物音ひとつしない森だ。

—— いつものように休むことなく降り続く雪。

—— この森で暮らしているのはもう“オレたちしかない”。

—— ザッ—— ザッ—— ザッ—— ザッ——。

—— 雪の上を歩きやすくするため、底の表面積が異常に広い靴。

—— その靴が雪を踏みしめる音は。

—— 森に木霊して。

—— 消えた。

—— もうこの森には。

—— オレたちしかない。

—— オレしか。

少年は、しばらくして雪の原の中心にポツリと立っている石の柱の前で足を止めた。

「……………」

少年はしばらく黙って、石柱を見つめていた。

「……………コイキ。…………元氣か？…………オレ？オレはまだあま元氣だよ。」

「オレさあ、“あの日”から少しは強くなったと思うよ。」

「だから、見てくれよな。…………オレの強くなったところ。」

「ばーちゃんとじーちゃんは…………元氣じゃないけど何とかやってるよ。」

「…………じゃあ、そろそろ行くよ。またな……………」
「コイキ。」

そういうと少年は石柱に背を向け、森の奥へと歩き出した。

少年の足取りはゆっくりとしていて、重かった。

——ザッ——ザッ——ザッ——ザッ——。

「ふう……大分歩いたな。確かこの辺に罠を仕掛けておいたはずなんだけどなあ……。」

少年は周囲を見回しながら呟いた。

少年は周囲をうろろしながら罠の跡を探した。

少年はしばらくしてピタリと足を止めた。

（……ウサギの骨だ。……それに回りにたくさん足跡がある。この足跡は……オオカミだな。……まだ新しいな……微かだけどまだ匂いも残ってる。）

（あいつら、いつも群れで動いてるし。……この辺にいるとしたら多分複数いるな。）

その時、ふと少年は辺りの異変に気がついた。

（……オオカミだ。……囲まれてるな……5頭はいる。）

——シャ！

少年は咄嗟にポケットからナイフを取り出した。

少年の周囲をオオカミ達を取り囲んでいる。

「ウウウ・・・グルルルルル。」

少年は平然として、冷たい眼差しでオオカミ達を睨んだ。

「・・・オレ、お前らのこと大嫌いなんだ。」

「グルルルル・・・ウウウガウガアーーーー！！！！」

シュ！――。

――さっきまで森中に響いていたオオカミ達の唸り声がピタリと止んだ。

――いつの間にか。

――森はいつもの静けさを取り戻していた。

――もう、そこには少年が一人立ち尽くしているだけだった。

「ふう……. やつと終わったな。……イテテ、ちょっと噛まれたな。」

少年の腕からは少量とは決して言えないほどの血が流れていた。

「……ちくしょう……。こりゃ、家に帰ったら手当てしないとマズイかな……。」

「……じーちゃんにはどうやって隠そうかなあ……。」

そういつて少年は苦笑した。

少年は持っていた数本のナイフから血をふき取ると、オオカミの骸を集め始めた。

「……今日は大量だなあ……。……これではーちゃんの薬がたくさん買えるなあ……。……良かった。」

少年は嬉しそうに顔に付いた血を拭き取ると、オオカミの骸が入った袋を担ぎ、紅いの雪野原から去っていった。

――降り止むことの無い雪は。

――その紅く染まった雪の原を。

—— かけ消すかのように。

—— 白く覆った。

第二章　誰もいないこの森で（後書き）

私たちは時間の中で生活しています。

私たちはひとつとして同じ物の無い時計です。

私たちはみんなそれぞれ、周りのいろんな人との時間を刻んでいます。

私も皆さんと一緒に時間を刻むことができ、嬉しいです。

そしてこれからも一緒に時間を刻むことができたらいいと思っています。

キクルたちは一体どんな時間を刻んでいくか？

楽しみにしていてくださると嬉しいです。

なんか臭いセリフ吐きましたが気にしないでください・・・。

よろしくお願いします。

第三章　そしてボクらは出会った

第三章　そしてボクらは出会った

——ザッ——ザッ——ザッ——ザッ——。

「イテテ……。なかなか血が止まらないなあ……。」

少年は腕に巻いた包帯からにじみ出てくる血を気にしていた。

——ザッ——ザッ——ザッ——ザッ——。

「はあ……。はあ……。はあ……。はあ。」

少年は白い息を吐きながらひたすら歩き続けた。

これだけのオオカミの骸を背負って歩いているのだ。

大人2、3人でも一苦勞なのだから、息が切れるのも当然といえば当然だった。

「まだ、家までは結構あるなあ……。」

少年は溜息をつきながらも足を前へ前へと進めた。

ザッ——ザッ——ザッ——ザッ——。

「はぁ………はぁ………。」

ようやく、少年の視界はあの小さな小屋をとらえた。

「ふう………やっと着いた……。……さすがに重かったなあ。」

少年の足は小屋が近づくにつれて次第に速まった。

「はぁ………はぁ………はぁ……。……よっこらしょっと………」

少年は玄関の戸に手をかけ、静かに戸を開けた。

……カラカラカラ。

「………。」

（………とりあえず、腕の怪我だけは包帯で隠さないと………。
イテテ………まだ血が止まってないなあ。）

少年は音を立てないように、静かに荷物を下ろした。

「・・・・・・・・・・？」

（あれ・・・・・・・・？おかしいな・・・・・・・・なんでこんなに静かなんだろう・・・・・・・・？）

少年は少し不思議そうに辺りを見回した。

（あつ・・・・・・・・ばーちゃんの部屋の戸・・・・・・・・開けっ放しだ・・・・じーちゃんが閉め忘れるなんて珍しいなあ・・・・。）

少年が戸に向かおうと一歩踏み出したときだった。

「・・・・・・・・？」

少年は床に落ちている紙切れを見つけた。

「・・・・・・・・なんだろ、これ？」

少年は手に取った紙切れに書かれたメモを読み始めた。

「・・・・・・・・・・えっ？」

少年の顔が凍りついた。

——キクルへ。

母さんの具合が急に悪くなったから、ちょっとラク先生の所に診せに行ってくる。

心配せんでくれ。

キクルは仕事から帰ってきたばかりで疲れてるだろうから、今日はじーちゃんに任せて家でゆっくりしてなさい。

本当に大丈夫だからな。

心配せんでくれ。

——じーちゃんより。

少年は現状がよく理解できないでいた。

・・・ばーちゃんの具合が悪くなった？

・・・じーちゃんは一人ではーちゃんを連れてラク先生のところに向かった？

・・・そんなあ！！

・・・だって・・・だって、昨日まであんなに咳が治まって具合良かったのに！！

・・・どうして？ねえ、何で？・・・何でだよお！！

・・・たくさん薬飲めば治るんじゃないの？

・・・オレが頑張っていれば。

・・・ばーちゃんは良くなるんじゃないの？

・・・こんなのないよぉ！

・・・こんなにあんまりだよぉ！！

・・・じいーちゃん！！

・・・ばあーちゃん！！！！

「・・・大変だ・・・大変だぁ！！！！」

（ラク先生の町までは、この森の中を通らなくちゃいけないのに！！じーちゃん一人ではーちゃん運んでいくなんて無理だよぉ！！）

（じーちゃん、自分で言ってたでしょや！！この森には危ない猛獣がいるって！！・・・なんで一人で勝手に行っちゃったのさぁ！！）

「あう・・・うぁ・・・！！早く・・・早く追いかけてくちや！！」

ドカ！！

少年は持っていた荷物を放り投げると玄関を飛び出した。

少年が脱げた靴を拾おうと体をかがめた時だった。

「・・・・・・・・!!!?!」

ドサッ。

少年は突然膝をついた。

「えっ・・・・・・・・なんだあ?・・・・・・・・体が動かねえ・・・・・・・・?あっ・・・・・・・・?」

少年は自分の腕を見てギョツとした。

少年の腕から初めよりも明らかに大量の血がにじみ出ている。

「・・・・・・・・やべえ・・・・・・・・走りすぎて傷口が開いた・・・・・・・・のか・・・・・・・・。うつ・・・・・・・・?」

少年はその場に倒れこんでしまった。

「ち、力が・・・・・・・・はいらねえ・・・・・・・・ちくしょう・・・・・・・・じーちゃんと・ばーちゃんが・・・・・・・・大変なんだ・・・・・・・・!」

「こんな・・・・・・・・ことしてる場合じゃあ・・・・・・・・ないんだ・・・・・・・・!うつ・・・・・・・・この・・・・・・・・!」

少年はなんとか体を起こし、足を踏み出した。

——その時だった。

少年は周りの光景の異変に気がついた。

背筋が凍りつくような。

異変に。

「・・・・・・・・!!」

「・・・・・・・・お、オオカミ・・・・・・・・!」

そう。

少年の周りにオオカミが取り囲んでいたのだ。

その数、およそ20頭。

しかも、大きさも先ほどより大分大きいオオカミばかりだ。

少年の頭の中で祖父の言葉がよぎった。

———　　いいか、キクル。

オオカミってのはなあ、集団で狩りをするんだ。

若いオオカミはまだ経験が少ないから大きい獲物に平気でかかっていくけどな、本当に賢い大人のオオカミはじっと待つんだ。

――獲物が弱るのを。

「……………!!」

少年は咄嗟にポケットに手を入れた。

「あっ……ああ……うわ……!!」

――ない。

――ナイフがない！

――慌ててたから家に忘れてきたんだ……！

少年はその瞬間に思った。

――やられた。

――さっきのオオカミは全部子供のオオカミ……！

――あいつら、ずっと待ってたんだ。

――オレが弱るのを。

少年はその時初めて感じた。

“狩られる恐怖”を。

—— ああ．．．狙われるってこんなに怖いのか．．．。

—— “オレってこんなに怖いやつだったのか。”

「うう．．．うわあああああ！！」

少年は恐怖のあまり大声で叫びながら逃げ出した。

「うわあ．．．！！うわあああ！．．．だれかあ！！助けてえ！！．．．だれかあ！！」

「ガウ！！ガウウウ！！ガウウウウ！！」

さすがに大人のオオカミだけあって、動きが素早い。

完全に疲労しきった少年が追いつかれるのも時間の問題だった。

「うわあ．．．はっ．．．はっ．．．はっ．．．はっ．．．うわあああ！！うわ！！」

ズサッ！！

少年は勢いよく転んだ。

「ガルルウル！！ガルルルウ！！！」

——もうダメだ。

——ごめん、コイキ。

——オレ、やっぱり弱いままだったよお・・・！！

そう少年が思ったときだった。

不意に前方から声が聞こえた。

「・・・なあ、おまえ。なんで叫んでんだ？」

「えっ・・・！？」

キクルは見た。

——真っ白な綺麗な髪。

――両腕を拘束する異様な鎖。

キクルの前に立っていたのは子供だった。

訳が解らなかった。

自分が、今までもう誰もいないと思っていたこの森に。

見たことも無い。

一人の少年が現れたのだ。

「え．．．あ．．．あ．．．？」

キクルは言葉が出なかった。

少年はキクルにこう告げた。

「なあ、おまえ“トモダチ”か？それとも“テキ”か？」

第三章↳そしてボクらは出会った（後書き）

やっと、きみカケおなじみのキャラの登場です！

これから大きく物語に絡んでいくキャラなので楽しみにしていてくださると嬉しいです。

第四章　もう一度だけ

第四章　もう一度だけ

「なあ、おまえ“トモダチ”か？それとも“テキ”か？」

月の光が雪に乱反射し、薄暗く光る雪の原で白い髪の少年は立っていた。

「……えっ……？」

キクルは少年の思いもよらぬ言葉に戸惑った。

トモダチ。

それは。

オレの。

オレの……！

大切な……。

言葉。

じーちゃんやばーちゃん・・・コイキにしか。

言えなかった。

言葉・・・。

「なあ。お前はどっちなんだ？」

白い髪の少年は迫った。

自分に問いかける少年がいる。

キクルはもう自分のおかれている状況も忘れていた。

「・・・・・・・・・・トモ・・・ダチ・・・」

無意識に出た言葉だった。

「ガルルウルル・・・ガウガウウウ！」

オオカミの群れのうちの一匹がキクルめがけて飛び出してきたのだ。

「えっ・・・あ！」

——キクルが我に返った瞬間だった。

ヒュオッ！

キクルの前を何かが通り過ぎた。

バキッ！！

「キャンッ！！」

ズササササッ——ドン！

オオカミはものすごい勢いで大木に叩きつけられた。

そう。

キクルの前に、ものすごい勢いで少年が飛び出したのだ。

「ごめんな？じっちゃんにトモダチは守れって言われてるんだ。・
・おまえらはテキか？」

「グルウウウウ・・・！」

——ザッザッザッザッザッザッザ——。

オオカミ達は少年に恐れをなしたのか、その場から去っていった。

「行っちゃったなあ。」

白い髪の少年はのんきに言った。

「あ、あの・・・どうして・・・？」

キクルは静かに少年に聞いた。

「ん？・・・へっへっへ、初めてなんだ。・・・トモダチって
ってくれたヤツ。」

少年は笑いながら答えた。

「トモ・・・ダチ・・・。オレは・・・。」

——
声が出てこない。

——
コイキ。

——
ごめん。

「オレも・・・初めてだよ。」

「へえ、そうなんだ。じゃあ、オレツちと同じだなー！」

「・・・う、うん・・・。あ、あの・・・。」

「なんだ？」

「・・・名前・・・なんて言うの?」

キクルは小さい声で聞いた。

「ごめん、忘れた。」

「えっ・・・?」

「本当ごめんな〜! オレっち何も覚えてないんだわ。てゆうか、今までどこで何してたかとも思い出せないんだ。」

「そう・・・なんだ・・・。」

——この子・・・記憶喪失かな?

——どこから来たんだろう?

——こんな綺麗な白い髪の毛・・・見たこと無いなあ。

「あ・・・・・・・・その・・・じゃあ・・・髪の毛が白いから“シロ”っ

て呼んでいい？」

キクルの言葉に少年は目を輝かせた。

「シロ！？かつこいいなあ〜！それがオレっちの名前か！？“シロ”ってどんな意味なんだ？」

「いや・・・だから、髪の毛が白いから・・・。」

「・・・へえ〜！かつこいいなあ〜！“シロ”か〜！そういえば、お前の名前は？」

「・・・キクル。」

「キクル！？それもかつこいいなあ〜！なあなあ、それはどんな意味なんだ？」

「・・・！！！！」

「な？なあなあ？」

「べ、別に意味なんか無いよ……。」

「へえ、そうか。でもかつこいいなあ……。ところでキクルはこんなところで何やってたんだ？」

シロの言葉にキクルは自分の目的をようやく思い出した。

「あ……。ああっ！」

「……どうした？何かあったのか？」

「……じーちゃん！……ばーちゃん！！」

キクルは叫んだ。

「……は？じっちゃんがどうしたって？」

「オレ……オレ！……助けに行かないと……！ソリの跡追わないと！……追わないと……！！！」

「ソリ？・・・ってこの跡のことなのか？・・・これを追ってるのか？」

シロの質問は最早キクルの耳には届いていなかった。

「・・・ごめん、オレ・・・行くわ！」

「ちょ、ちょっ・・・うわ！」

キクルは立ち上がるとシロを押しつけ、ソリの跡に沿って走り始めようとした。

「早く・・・早くしないと・・・あ・・・？あれ・・・？」

キクルは急にバランスを崩すと、その場にうずくまってしまった。

（あ・・・そうだ・・・オレ・・・ケ・・・ガ・・・してるんだっ・・・
た。ちくしょう・・・動けねえ・・・。）

「・・・い！・・・ど・・・した・・・だ！？」

(あ……あ。ヤバイ……意識が……。)

。

——
じーちゃん？

——
ばーちゃん？

——
オレ……死んだのか？

——
真っ暗だ……。

——
何も……何も見えないよ……。

——
コイキ……。

——
怖いよお……！

何も見えないよお!!

・・・・・・・・？

あの光は？

・・・・・・・・うわ！

。

キクルはゆつくりとまぶたを開けた。

「よお、目え覚めたか？」

「あ・・・・・・・・ラク・・・・・・・・先・・・・・・・・生・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・よづ。」

そこには白衣を着た大柄の若い男が立っていた。

「・・・・・・・・ここは？」

キクルはまだ意識がはっきりしない様子で辺りを見回した。

「ああ、俺の診療所だ。・・・・・・・・たく、無理しやがって。」

「・・・・・・・・診療所？」

しばらくして、頭の中の記憶が蘇ってきた。

「・・・・・・・・あ、・・ね、ねえ！」

「ん？」

「ばーちゃんとじーちゃんは!？」

「ふう・・・おめえのばーちゃんとじーちゃんなら大丈夫だ・・・。」

「・・・本当なの！？ね、ねえ・・・！」

「・・・ああ。おめえの方こそまだ怪我が治ってねえんだから下手に動くなよ。」

「・・・よかったあ・・・本当に・・・。」

キクルの顔に安堵の表情が浮かんだ。

少しの間二人の間で沈黙が続いた。

しばらくしてラクは言った。

「・・・ところでよ・・・あの白い髪のパウズは誰だ？」

「・・・あ・・・。」

「いや・・・怪我したお前を担いだままここにきて、いきなりお前を俺に預けるとその場で寝ちまったからよ・・・。」

「……その……シロって言うんだ……。」

「……シロ……ね……。わっかかりやすい名前だな……。で、
……お前とどんな関係の子なんだ？」

「……トモ……ダチ……。かも……。」

「は？……お前の！？」

「……うん。」

「……マジか？」

「……うん。」

「……そうか……。なるほど……。ね……。」

（……よくまあ……。勇気が出たな……。）

「……シロは……。今どこにいるの？」

「ああ、あいつなら隣の待合室に居るはずだぜ。」

「・・・ちよつと行ってくる。」

キクルはベッドから降りようと体を起こした。

「!!・・・ダメだ・・・忘れたか？オメエはまだ怪我が治ってねえんだ。・・・オレが呼んできてやるから静かにしてる。」

ラクは真剣な顔つきでキクルを制止した。

「・・・わかった。じゃ・・・待ってる。」

「おう・・・じゃ、ちよつくら呼んでくるわ。」

・・・ガチャ・・・パタン・・・

「・・・ふう・・・。」

「・・・やつとあいつも・・・変わり始めたか・・・。」

ラクはそういつて、一人天井を見上げて呟いた。

「・・・よかったな・・・シサム・・・オメエの息子もやつと
また友達ができたみたいだぞ・・・。」

「・・・。」

「へへっ・・・やっぱそうこなくっちゃな。」

「ああ・・・わかってる・・・俺たちも友達だよな。」

ラクは笑った。

「さてっと・・・じゃ、あのボウズを起こしに行くか・・・。」

ラクはそういつと、シロの眠る部屋へと向かっていった。

・・・ガチャ・・・パタン。

「おーい、ボウズく起きてるか・・・って・・・あり？」

部屋の中には、少年の姿らしきものは見当たらない。

「やべ・・・目を放した隙にどこかに行っちゃったかな？」

ラクは部屋の中をざっと見渡した。

「・・・・・・・・。」

しかし、やっぱり少年の姿は見当たらない。

「いねえな・・・やっぱ・・・・・・・・他を探してみるか・・・・
まだ、そんな遠くには行ってねえだろう。」

ラクがそういつて部屋を出ようとドアノブに手を掛けた、その時だった。

「なあ、おまえ“トモダチ”か？それとも“テキ”か？」

「どわっ！！」

急に背後から声がして、ラクは飛び上がった。

振り向くと白い髪少年が電灯に逆さづりにぶら下がっていた。

「なんだ急に！はあ・・・オメエなあ・・・おどかすなよ・・・あゝビクった・・・。」

ラクはそういつて胸を撫で下ろした。

「・・・なあ、おまえ“トモダチ”か？それとも“テキ”か？」

少年は繰り返す。

「・・・あのなゝゝ。・・・ま、いつか・・・。そうだな・・・トモ・・・ダチ・・・かな？」

ラクがそういうと少年はニッコリ笑った。

「へっへっへ、なんだトモダチか。オレっちいきなり知らねえところで寝てたもんだから、ビックリしてたんだ。・・・で、ここ何処なんだ？」

「俺の・・・家みたいところさ・・・。」

「へえ、そうなのか！」

少年はウキウキしながら部屋を見回した。

「全く・・・変なボウスだな。ところで・・・。」

「ん？」

「キクルがオメエのこと呼んでたぞ。」

「・・・は？キクルって何だ？食べ物か？」

「オメエ・・・本当に・・・友達か・・・？てか、食べ物が呼ぶハズねえだろ・・・。」

そういつて、ラクは溜息をついた。

「・・・さっきまでオメエが担いでたボウズのことだよ。」

「あゝ！さっきの！・・・で、ボウズがどうしたって？」

「だあああゝゝもう！いいから、俺についてこい！」

「うわっ！っとうっとうっとう・・・。」

ラクはそういつて、シロを片手でヒョイと抱えるとキクルの待つ部屋へと向かった。

ガチャ・・・ボタン！

「おい、キクル！オメエの友達連れてきたぞ！」

そういつて、抱えていたシロを降ろした。

「ラク先生・・・それに・・・シロ。」

「・・・あ！お前のことだったのか！え〜と・・・クキル？」

「・・・キクル。」

「あ、そうそう、それ！キクルだ！」

「・・・。。。」

キクルはラクの方をチラッと見た。

「じゃ、俺は一服してくるかな・・・。。。」

ガチャ・・・ボタン。

ラクは部屋に2人を残して出て行った。

「・・・さてつと。ふっ・・・・・・・・俺って気が利くなあ〜。あ

とは自分で頑張れよ・・・キクル。」

そう呟くとラクは自分の部屋に向かって歩き出した。

しばらく、キクルは黙っていた。

「なあなあ！何かオレっちに話があるんだろ？どんな話なんだ？」

シロは好奇心いっぱい顔でキクルを覗き込んだ。

「・・・・・・・・。」

キクルはじつとシロの顔を見つめている。

「なあなあ！」

「あ・・・さ。あの時言った言葉って・・・本当にいいの？」

「ん？あの時って、なんだべ？」

「だから・・・シロがオレを助けてくれたときの・・・。」

「シロ!?!?・・・ってなんだっけ?ごめんな〜!オレっちすぐく忘れっばいんだわ。」

「・・・君の名前のこと。」

「・・・あ!そっか!そうだったな〜!シロ!かっこいいべ!?!?かわいいべ!?!?へっへっへっへっへっへっへ!」

「それでき・・・。」

「ん?」

「シロがオレのこと助けてくれたでしょや?」

「あゝ、あの時が・・・で、なんだべ?」

「あの・・・だから・・・その・・・。」

「うんうん。」

「オレ・・・口・・・トモダチ・・・になっ・・・も・・・の？」

「ん？なんだって？」

「オレ・・・！シロの・・・トモダチに・・・なっても・・・いいの？」

「・・・ああ！オレ達トモダチだべさ！！」

「・・・本当に・・・いいの？」

「ああ！」

—— オレの・・・。

—— トモダチ・・・。

—— また。

溜めていたものが。

オレの中から。

音を立てて。

流れ出た。

ベロツ!!

「っぷ!?!」

「すげえ!!それ何なんだ!?!うめえな!キレイだな!なあ!なあ!」

「ひっぐっ・・・涙を・・・ひくっ・・・知ら・・・ひつく・・・ない・・・のお・・・?」

「ごめんな。オレっち泣いたことなんだ・・・てか、何かわからねえけどソレ、出てこねえんだ。いいナア・・・それ。」

「・・・?・・・あっ・・・!」

泣いたことがない？

涙が出ない？

そういえば・・・じーちゃんが言ってた・・・。

“ヒトガタ”

感情が欠けてる人間。

何かが欠けて生まれてきた人間なんだって。

みんなから仲間はずれなんだって・・・！

オレたちと同じ・・・。

同じなんだ。

きっとシロも。

—— 同じなんだ！

—— そう。

—— あれはきっと偶然なんかじゃなかったんだ。

—— きっと・・・。

—— きっと！

—— 神様がオレたちに。

—— きっとオレにも！

—— トモダチになるチャンスを。

—— もう一度。

—— もう一度だけくれたんだ！

——もう一度。

第四章　もう一度だけ（後書き）

ちよつと、家族で旅行に出かけていまして遅れました、すみません。
まだまだ、話は続くのでこれからもよろしく願います。

第五章　受け入れぬ孤島

第五章　受け入れぬ孤島

昨日まで吹いていた吹雪が止み、静かになった頃だった。

ドンドンドンツ。

「シ～ロ～！起きろ～！朝ごはんの時間だぞ～！」

「・・・・・・・・ふああ。・・・・・・・・クキルか～～・・・・・・・・今行くぞ。」

「キ・ク・ル！もうそろそろ一週間たつんだぞ・・・・・・・・いい加減覚えるって。」

「へっへっへ、悪いな～オレっち・・・・・・・・。」

「あーハイハイ、わかってるわかってる。忘れやすいんでしょ？」

「えっ！？何でわかったんだ！？」

「あのね・・・そりゃ毎日耳にタコができるくらい聞いてりゃ誰だって覚えるって。」

「タコ！？タコって何だ？食えるのか？」

「あーそれも聞き飽きた。・・・・・・・・タコっていつのはね・・・厚い皮のことだよ。」

「厚い皮・・・？皮つて何だ？」

「はぁ・・・もういいって。ホラ！ご飯、冷めちまうべさ。早く行こう。」

「うん！」

「はっはっはっ、スゲー嬉しそうな顔。」

———いつの間にか。

———オレは。

———よく笑うようになっていた。

シロと診療所で過ごし始めてから、もう一週間になる。

シロとのやり取りも大分慣れた。

最初はオレもラク先生もじーちゃんも苦労したけど。

でも、なんだか楽しい。

オレたちはシロが来たことで。

なんだか、賑やかになったんだ。

でも。

．．．朝、目が覚めるとオレはいつも思う。

．．．オレは一人じゃないだろうか？

．．．これは夢で。

．．．本当は、シロは幻で。

．．．いつものように、オレは。

．．．狭くて広い部屋に一人ぽっちなんじゃないかって．．．！

．．．もう二度と。

．．．トモダチなんかできないんだって．．．！

——気づくとオレの目から涙がこぼれていた。

オレは。

よく、笑うようになった。

そして。

よく、泣くようになった。

失うくらいなら。

最初から、いない。

イラナイ。

ホシイ。

イラナイ。

ホシイ。

イラナイ。

ホシイ。

イラナイ。

ホシイ。

イラナイ。

ホシイ。

イラナイ。

ホシイ。

イラナイ。

ほしい。

今度こそ。

オレが守るんだ。

シロを。

もう、絶対に。

失わない。

絶対に。

ガチャ・・・バタン。

「ラクせんせい、じーちゃん！シロ連れてきたよー。」

部屋の中で、朝食を作り終えたラク先生とじーちゃんが座っていた。

「おはよう、キクル、シロ。ささ、早く座りなさい。」

「遅い！はぁっ、やっとメシが食える……。オメエらが遅いせ

いで・・・ずっと・・・ずーっと食うの我慢してたんだからな
！」

ラクはハシを握り締めながらいった。

「ごめんごめん、先生。・・・だってさー、シロったらなかなか起きないんだもん。」

「へっへっへ。」

シロは可笑しそうに笑った。

「ほらほら、早く2人とも座りなさい。」

キクル&シロ 「はい。」

「朝から元気だね・・・、俺はオメエらが夜まで騒いでるおかげで寝不足だぜ。」

「さっきまで、騒いでた先生に言われたくないよーだ。」

「・・・へん！口の減らねえボウズだぜ、全く・・・。」

「まあまあ、2人とも。さ、じゃあ、お祈りして早く食べよう。」

「ん？お祈りってなんだべ？」

キクル&ラク&じーちゃん 「いい加減に覚えろ～～～!!!!」

「うおっほん。・・・じゃ、いくぞ。ホレ、シロもみんなに続けて
言ってみなさい。」

キクル&ラク&じーちゃん 「神様、今日も我らに豊かな恵みを一
糧たまわりありがとございました。」

「え、え〜っと・・・ありがとうございます!」

シロの言葉を聞いてみんな、可笑しそうに笑った。

みんな 「いっただつきまーす!」

しばらくの間、楽しそうな会話が絶えることは無かった。

「ふう〜、食った食った・・・。おやつさん、ごちそーさん。」

キクル&シロ 「ごちそーさまー。」

「ああ、どういたしまして。．．．ちょっと待ちなさい、先生。」

「ギクツ。．．．．．ど、どうした、おやっさん。」

「今日は先生が皿洗い当番のはずだが？」

「．．．．いやゝ、えゝつと．．．でも俺今日買出しに行かないといけないし．．．。」

「買出しなら私とキクルとシロとみんなで行くから、安心して皿洗いしてくれていいんだよ？な、せーんせい？」

「はあ．．．わかりましたよ．．．。でも、マジで今日買い出しに行かないといけないんすよ。」

ラクは困った顔で頭をかいた。

「．．．先生。オレが行ってくるよ。．．．じーちゃんはここで待つてよ。」

キクルは何か不安そうにラクに訴えた。

「．．．．そうだな。じゃ、キクルに頼むかな。」

「何言つとるんだ、私だって買い物ぐらい行けるわい。キクルの方こそ、今日はシロと遊んでいなさい。」

「．．．．いやだ。」

「・・・ん？珍しく聞き分けが悪いな。・・・わかった、じゃあみんなと一緒にいこう。」

「・・・！！ダメだったら！オレが一人で行くって！」

「・・・じーちゃん・・・いつも足手まといは嫌なんだ、今くらい役に立たせておくれよ。」

「！！・・・じ、じーちゃんは今のままで十分役に・・・。」

じーちゃんはオレの顔をじっと見ていた。

「・・・わかったよ・・・じゃあ、一緒に行こう・・・。」

「あ、オレっちも行く！」

「・・・いいよ。じゃあ、準備してから行こうか。」

三十分後・・・。

「じゃあ先生、行って来ます。・・・ばーちゃんのことお願いします。」

「ああ、任せろ。」

「・・・。。。」

浮かない顔でキクルはラクを見た。

「よし、じゃあ行こうか、キクル。」

「なあなあ！早く町に行くべ！」

キクルは2人に連れられて、歩き出した。

——本当は。

——誰も。

——誰も連れて行きたくなんかなかった。

——誰も。

——ザザッザザッザザッザザッザザッザザッザザッザザ——。

いつもとは雪を踏みしめる音が違う。

なんだか、あつたかくて。

やさしい。

一人ぼっちで歩いていた頃よりずっと。

「キクル、ところで町はどんなところなんだ？じーちゃん、あの小屋に越してきてから一度も行ったこと無いんだわ。」

「どうって・・・行けばわかるよ。・・・そんないいところじゃないよ？・・・だって、もうこの町にも狩人族のウワサは届いているんだから。」

キクルは言った。

「・・・・・・・・。」

「なあなあ、キクル。オレっちは何かしなくていいのか？」
シロはキクルの顔を覗き込んで言った。

「シロは・・・・・・・・迷子にならないで。」

「同感だな。」

「まいご？迷子ってなんだ？」

「あーっと、・・・つまりオレたちから離れなければいいってこと。」

「あゝ、なるほどー！」

そんな会話がしばらく続いていた。

しばらくして、キクル達は町の入り口までたどり着いた。

その町の周りには、外部からの人間の侵入を遮断するかの様に、高い石積みの壁がそびえ立っていた。

「すっげええ！！何だ何だ、コレ！でっけな〜！！」

「この壁は・・・外部からの他民族の侵入を防ぐための壁さ・・・。」

「・・・たみんぞく？」

「よーするに、知らないやつのことさ。」

「ふ〜ん。」

「しかしな、キクル。他民族が入れないんじゃあ買出しにいけんぞ・・・どうやって入るんだ？」

「・・・それは大丈夫。ちゃんと入り口の受付を通せば入れるんだ。ただし・・・一度に入れる人数は5人以内だけだね。」

「・・・そうか。じゃあ、入り口の受付はどっちなんだ？」

「・・・オレについて来れば大丈夫。」

そういつて、キクルは受付を目指して歩き出した。

しばらくすると、小さいが頑丈そうな門が見えてきた。

「止まれ。・・・お前か。・・・そっちの連れは見かけない奴らだが・・・まあ他民族だということは明らかだな。」

冷たい目で門番は三人を見た。

「みんなで町に入りたいのですが、入れてもらえますか？」
キクルは前に一歩出ると、門番に頼んだ。

「3人なら大丈夫だ。ただし、武器を所持してはいないだろうな？
あるなら、今のうちに私に預ける。」

「はい、今日は武器は所持しておりません。」

「よし、念の為身体検査する。」

そういつて、門番は三人の懷をチェックし始めた。

「うわっ！なんだ、お前オレっちに何してるんだ！？」

「口の利き方に気をつけろ・・・よそ者の分際で・・・。」
そういつて、門番はシロを睨んだ。

「シロ！黙ってて！もう喋ったり暴れたりしちゃだめだぞ！」

「・・・おう、わかった!」

シロは両手で口を塞いだ。

「・・・よし、異常なしだ。ところで、今回の目的は何だ?」

「はい、食料の買出しです。」

「わかった、じゃあこのバッチを付ける。おい、門を開けろー!」

ギィ・・・ゴゴゴゴゴゴ。

いかにも重そうな音を立てて門が開いた。

門番から渡されたバッチは星の形をしていた。

「じーちゃん、シロ、これつけて。」

「なんだコレ!?! かつこいいな〜!」

「ダビデの星って言うんだ・・・。よそ者の印だよ。・・・じゃあ、行こう。」

三人は町の中へと足を進めた。

「うわーすっげー!! これが町か〜!」

シロは目を輝かせた。

「こんなに大きな町とは思わなかったな．．．」
じーちゃんも物珍しそうに見渡した。

「じーちゃん、シロ、くれぐれも離れないでね。あつ、あと警備員に会ったら絶対挨拶を忘れないでね。」

「あ、ああ．．．まあ、常識じゃないか？」

「絶対に忘れないでね．．．じゃあ行くよ。」
キクルはそういうと歩き出した。

町の中心街は多くの人で賑わっていた。

「すっげー、人がたくさんいるな。」

「確かに、じーちゃんもこんなに人を見たのは久しぶりだな。」
嬉しそうに言った。

「そりゃ、この辺で大きな町はここしかないしね．．．。」

「ところで、キクル。食料はどこに売ってるんだ？」

「それなら、向こうの角を曲がって、まっすぐ行って、左手の方にあるよ。」

「そうか。じゃあさっさと済ませようか。な？キクル。．．．ん？」

「．．．．．。」

キクルは心配そうに周りを見回している。

「キクル．．．どうした？」

じーちゃんはキクルに言った。

「いや．．．別に．．．なんでも．．．あつ！」

キクルは前から来る２人の警備員に気がついた。

「おはようございます！」

キクルはすぐに挨拶をした。

「お、おい、シロ待たんか！」

警備員の後ろの方を歩いていたシロをじーちゃんが捕まえようとした時だった。

「おい！そこのお前！待て！」

一人の警備員がじーちゃんに言った。

「は？．．．何か？」

じーちゃんは警備員に聞き返す。

「お前よそ者だな、しかもそのカケラ・・・狩人族か。挨拶はどうした。」

じーちゃんはキクルに言われていたことを思い出した。

「あつ、すみませんでした。・・・おはようございます。」

そう言つて左腕で帽子を取つて挨拶した。

バキッ！！

「うわっ！！」

じーちゃんはいきなり顔面に直撃した拳に吹き飛ばされて倒れた。

「じーちゃん！！じーちゃん！！大丈夫！？」

慌ててキクルはじーちゃんのそばに駆け寄つた。

「う・・・じ、じーちゃんは大丈夫・・・だ。」

「次やったら、殺すから覚悟しておけ。」

警備員は冷たく言い放つた。

「すみませんでした！」

キクルは慌てて謝つた。

「・・・す、すみません。」

キクルに諭され、じーちゃんも謝つた。

「さ、さて・・・買出しを続ける・・・か。」

じーちゃんはヨロつと左腕を使って立ち上がると服についた雪を振り払い歩き出した。

「おい！」

警備員がまた呼び止めた。

「は、はい。．．．なんででしょうか？」

慎重にじーちゃんは聞き返した。

「よそ者は歩道を歩くな。そっちの溝の方を歩け、いいな。」
2人の警備員はそういう残すと、歩いていつてしまった。

「．．．．じーちゃん、行こう。」

「．．．．ああ。キクル．．．。」

「何？じーちゃん。」

「すまなかった。本当に．．．すまなかった。」
じーちゃんは言った。

「いいよ、アレくらいどうって事ないって。」

「．．．そうじゃない！今のことだけじゃない！今まで．．．今まで、こんな酷いことをお前にさせてたことを謝ってるんだ！．．．じーちゃんが．．．じーちゃんがすっかり面倒見られればお前にこんなことには．．．。」

「じーちゃん。オレはこの仕事をやりたくてやってるんだ．．．じーちゃんのせいじゃないよ．．．誰のせいでも．．．ないんだ。誰も．．．悪くない．．．誰も。」

「キクル……。」

「……だから、連れて来たくなかったんだよね……じーちゃんやシロを……。」

「……。」

「なぐに暗い顔してんのさ！…行こう、じーちゃん！」

「……ああ。……ん？シロはどこ行った？」

「えっ？」

キクル達は辺りを見回した。しかし、シロの姿は見当たらない。

「全く、あれほど迷子になると言っておいたのに……！！！」

「ど、どうしよう……！早く探さないと大変なことに……！」
そういつて、キクルが慌てて走り出そうとした時だった。

「コラ待て……！！この食い逃げヤロウ……！！！」

「わっわっ……わ……！オレっち何で追われてるんだー！！？オレ
っちはただいいニオイがしたからつい……。」

キクル&じーちゃん 「はあ……やっぱりね……（泣）」

「じーちゃん、買出しして先に帰ってて！オレ、シロを連れ戻して

帰るから。あつ、くれぐれも気をつけてね!!」

「ああ、わかった。キクル、お前も気をつけてな。」

「うん!」

そういつてキクルは走り出した。

「く、くそなんて逃げ足の速いやつだ・・・待ちやがれ!!」この食い逃げが!!」

「うわっわっわ!!」

「誰か!!そいつを捕まえてくれ!!!!」
シロを追いかけている男がそう言った、その時だった。

ビュオッ!!

「うわっ!!」

———
何かが男をものすごいスピードで追い抜いていった。

———
少年。

———
帽子を被った少年だった。

「ボウズ!!そいつを捕まえてくれ!!」

「……………」

少年からの返答は無かった。

「おい！！聞いてるのか！！」

少年はみるみるうちに逃走中の少年に追いついた。

「しろ！なにやってんだよ、こんなところで！」
走りながらキクルは叫んだ。

「おつ、なんだキクルか！！なんか知らねえけどオレっち追われてるんだ。」

「一体何しでかしたんだよ！」

「……………えゝつと……………忘れた。」

「はあ……………」

「あつ、えつとでもいいニオイがしたところまで覚えてるんだけどな。」

「いい……………ニオイ……………?」

「うん！いいニオイのするナベが置いてあったからちよつとつまみ食いしたんだけど……………」

「……………そりゃ食い逃げでしょや?」

「は？・・・食い逃げって？」

「お前のことだよ!!」

「なーんだ、オレっちのことが。ならシロって呼べばいいのにな。」

「だから・・・違うんだって（泣）」

「・・・なんだ？（泣）って？」

「もういい!!」

「じゃあ、これからどうする？」

「とにかく、どこかに隠れて様子を見よう!・・・あ、あの建物古くて誰も住んでなさそうだぞ・・・あそこに隠れよう!!・・・いくぞ、シロ!」

「お、おう!」

キクルとシロはそういうと、古びた建物の中に飛び込んだ。

ガランガランガシャーーン!!

。

「イテテテテ・・・シロ、大丈夫・・・?。」

キクルはゆっくりと起き上がりながら言った。
辺りは真っ暗でほとんど何も見えない。

「おう!」

シロは元気に答えた。

「はぁ・・・。なんでそんなにシロは元気なんだよ・・・。まった
く。ん・・・?」

キクルはシロの顔をみて、青ざめた。

「なんだ?どうした?」

「シロ・・・血!血!血が・・・血が出てるよ!」

シロの額からは夥しい量の血が流れていた。

「ん?・・・血?・・・うわっ!本当だ!」

「早く止めないと・・・!大丈夫なの・・・?痛くないの・・・!
?と、とにかく止血しないと・・・!」

キクルは慌ててシロの元に駆け寄った。

「・・・オレっち、痛み感じねんだわ・・・。」

・・・・・・・・！！

「・・・・・・・・そう・・・・なんだ・・・・。」
キクルは静かに言った。

その時だった。

「誰っ！？そこにいるのはっ！！！」

——ッ！！

いきなり強烈にまぶしい光に2人は包まれた。

「うわっ！」

2人はいきなりの出来事に一瞬怯んだ。

強烈な光によって部屋の様子が鮮明に目に飛び込んてくる。

どうやら、古い工場のような。

そして。

上を見上げると。

階段の上には少女が立っていた。

第五章↳受け入れぬ孤島↳（後書き）

またまた、オリジナルキャラ登場です。

これから、だんだん話が急展開の方向に向かっていきます。

これからのキクル達の冒険をどうか見守ってやってください。

最後に、アドバイスをくださいましたクノウさん、ありがとうございました。

一応自分なりに話の方向性などに、より気をつけてやったつもりです・・・ハイ。

第六章　何もできない。」

「ちょっと！黙ってないで質問に答えたらどうなの！？」
その少女は険しい顔つきで怒鳴った。

「あ、あの・・・オレたちは・・・ち、ちょっとここに隠れていただけなんだ。」

「理由は？なんで、ここに隠れてるのよ？」

「コイツが・・・オレのトモダチが追われてるんだ。コイツ食い逃げしちゃって・・・。」

「ふーん・・・お金無かったの？」

「へっへっへ、オレっちいいニオイがしたからつい・・・。」

「シロはちょっと黙ってて。話がややこしくなるでしょや。」

「お、おう！」

シロはそう言って両手で口を塞いだ。

「・・・お金が無かったんじゃない、シロはあんまり人と生活してなかったから・・・ルールがよくわかってないんだ。」

「そう！オレっちよくわかんねんだ！」

「・・・・・・・・だから、ちょっとでいいんだ・・・騒ぎが収まるまでここで・・・・・・・・。」

キクルがそう言いかけたときだった。

ドンドンッ！

上の方で強く扉を叩く音がした。

「や、ヤバイ・・・！あの、おじさんかも・・・。ど、どうしよう・・・！逃げようにも出口がひとつしかないさそうだし・・・。」

「・・・ちよつと待ってて。あんた達は隠れてればいいわ。」
そう言い残すと少女は階段を上っていった。

カン・・・カン・・・カン・・・カン・・・。

「どちら様？」

「おう、ピリカか……。ドアは開けるなよ。」

「……………」

「お前のところに丁度お前と同じ年ぐらいのガキが逃げ込んでこなかったか？」

「さあね、私は見てないよ。……そういえば、向こう方に走っていった子なら見たけど。」

「向こうだな？わかった。」

男はドアの向こうで返事をする、お礼も言わず走っていった。

「……………」

カン……カン……カン……カン……。

金属でできた階段を少女はまた下りていった。

「……………もう出てきて平気よ。」

少女がそう言うときクル達はホッとした様子で出てきた。

「あ、あの……ありがとう、かくまってくれて。」

「ありがとな!!」

「ふ、ふんつ。……私はただ……あのオヤジの態度にムカつただけだよ……。」

少女は顔を少し赤くしながら言った。

「あ……ところで自己紹介してなかったわね。私の名前はピリカ。あんた達、名前は？」

「……………オレ、キクルっていうんだ。」

「オレっち、シロな！シロ！かつこいい名前だべ!？」

「ふん……キクルにシロね……。」

ピリカはそう言いながらクル達をジロジロ見つめた。

「・・・・・・・・あんた達が付けてるバッチ・・・・ダビデの星かい？」

「えっ・・・・・・・・あ・・・・・・・・うん。」

「あ、何？私が、あんた達がよそ者だからって何かするとも思っ
たの？・・・・私はそんな寒いマネはしないから安心して。」
ピリカは笑いながら言った。

「・・・・・・・・そうなんだ。」

「そうよ。」

キクルは安堵の溜息をついた。

「あ、あの・・・・ところでさ・・・・・・・・。」

「ん、何？」

「ピリカはここに一人で住んでるの？」

「ううん。ここには・・・私とパパの2人で住んでいるんだ。」

「・・・パパ？・・・お父さんがいるんだ・・。じゃあ、お世話になったお礼をしないと・・・って、シロ！勝手にうるちよろしないで！」

そういつて、キクルはシロを捕まえた。

「わ、わっ！・・・ワリイワリイ、オレっちこの硬いカクカクしたヤツ初めて見たもんだからつい・・・。」

「・・・言われなくともその感じじゃあ、機械を知ってるようには見えないわよ。」

「・・・ねえ、ピリカ。・・・お父さんに挨拶しにいつてもいいかな？・・・オレのじーちゃんが“相手に何かしてもらったらちゃんとお礼をしなさい！”っていつも言ってるんだ。」

「・・・べ、別にいいわよ・・・そんなのしなくて。」

「なんで？オレ、本当に一言お礼が言いたいただけなんだ。」

「それって……………」

「あ、私の近くに寄らないほうがいいよ、きっと。……多分、病気がうつるから。……もう外には誰もいないから、……帰って大丈夫よ？」

「……………」

「……私は大丈夫だよ。……もう、慣れたんだあ……。知らない人に会うといつも……。いつもこんな感じだから……。」「ピリカの目から涙がこぼれた。

「……あつ……。……ごめん、……。……ごめんね……。」「ピリカはにじみ出る涙を拭きながら弱弱しく言った。

「初めはね……。……初めはね？結構、トモダチもいたんだよ？でもね……。……でも……。……みんな……。……いっちゃった……。……みんな、私から離れていっちゃったんだあ……。」「

「……………」

「楽しかったなあ．．．あの頃は．．．みんなで雪合戦したり．．
・トモダチの家に泊りがけで遊びに行ったり．．．みんな．．
みんな楽しかったなあ．．．。」

「．．．．．。」

「でもね？．．．みんな、いつちゃった。」

「．．．．．。」

「わ．．．私は．．．悪くなかったんだよ？．．．でも．．．で
も．．．パパが死んじゃう病気になったからって．．．。」

「．．．．．。」

「パ、パパと．．．一緒に住んでいる．．．わ．．．私と遊ぶ
と．．．うつるからって．．．!!」

——「おう、ピリカか．．．。ドアは開けるなよ。」

「！！！！」

バシッ！

キクルは無意識にピリカの頬を叩いた。

「ッ．．．！！．．．．．なっ、何すんのよっ！！」

「バカ！．．．．．パパのせいにすんな！！．．．パパだって．．．お前のパパだって好きで病気になっただけじゃないんだぞ！！」

「！！．．．あんたに．．．あんたに何がわかるのよ！！私は全部失ったのよ！！？．．．トモダチも．．．ママも．．．みんなみんなっ！！！！パパが病気にならなければこんなことにはならなかった！！」

バシッ！

「痛っ！！．．．二度も殴らないでよ、バカ！！」

バシッ！！

今度はピリカがキクルの頬を叩いた。

「．．．．．ッ！．．．．．ばーちゃんはな．．．．．オレのばーちゃんは言っただぞ。」

「…………。」

「……ごめん……ごめん……って……私のせいで
迷惑かけてごめんね……なにもできなくて……何もしてやれな
くて本当にごめんね……本当にかつこ悪くてごめんねって……
……！」

「…………。」

「気持ち悪いなら……うつるかもしれないから世話しなくても
いいんだよって……！！！」

「あんだ……もしかして……。」

「お前は……お前は……！！それなのに……そんなパパを
まだ責めるのか……！……オメエのパパだって何もできなくて悔
しいんだよ……何かできたらって……いつも思ってるんだよ
！」

「……そんなこと……そんなこと言っただって……！！私は……
……私はどうすればいいのよ……！？……トモダチも……ママも……
……もう……もう戻ってこないのよ……！？……それに……パ

「パだってもうすぐ・・・。」

「バカッ！簡単に諦めんなっ！！トモダチが欲しいなら、オレが・・・オレ達になってやるよ！！・・・だから、パパのこと諦めんなっ！！」

「え・・・？」

「オレたち、もうトモダチだべさ！！」

「本当に・・・本当に、トモダチに・・・なってくれるの・・・？」

「ああ！！な、シロもそうだべ！？」

「うんっ、オレっちはトモダチだ！！」

「で、でも・・・私といると・・・病気・・・うつるかもし

れないよ・・・?」

「オメエは、本当にその病気が他人にうつると思ってんのか?」

「・・・・・・・・!!!!」

「・・・パパの近くにいつもいたお前がピンピンしてるのに・・・
本当にうつると思うか!!!!?」

「・・・・・・・・。。」

「・・・・・・・・お前は本当にそう思ってるのかよ!!!!」

「ち、違う・・・・・・・・違うよぉ・・・・・・・・!!!!」

「・・・・・・・・。。」

「本当は・・・・・・・・わ、私・・・お医者さんに聞いたもん!!!!・・・
この病気は血液が原因の生まれつきの病気だって・・・・・・・・!!!!」

「・・・・・・・・。。」

「……うつらない病気だつて……!!!!」

「……。。」

「……でも……みんな私のこと……気持ち悪いって……
うつるから近寄るなつて……!!」

「……お前自身はどう思つてんだよ？」

「……わ、私……。」

「……。。」

「私は……私は……き、気持ち悪くなんかない!!!!……病
気だつて……病気だつてうつらないよぉ!!!!」

「……大丈夫、オレたちはお前のこと、気持ち悪いなん
て微塵も考えちゃいねえぞ？」

「……!!」

「オレの知り合いにお医者さんがいるんだ。だから・・・一緒に、
パパを病院に連れて行こう、な？」

「本当に・・・？」

「ああ！お前だって・・・パパの病気治したいんだろ？」

「・・・うん・・・うん！！」

「行こうぜ、一緒に！！」

「・・・うん・・・！！」

——
パパ。

——
「ごめんなさい。」

——
パパのせいじゃないよ。

私、悔しかったんだ。

私は・・・私は悪くないのに。

なんで、何もできずに失わなきゃいけないんだって・・・！

なんで、パパに。

何もしてやれないんだって・・・！！！！

私はこんなにカッコ悪くない。

自分が。

こんなに何もできないカッコ悪い奴だって。

認めたくなかった。

—— パパのせいにしたかった。

—— でも。

—— 本当はパパのせいじゃなかった。

—— みんな。

—— 私の思い込み。

—— 本当は。

—— 誰のせいでもなかったんだよね？

—— 誰も悪くないんだよね？

—— 誰も。

——
パパ。

——
本当に。

——
「ごめんなさい。」

——
「ごめんなさい。」

「うっ……うっ……うわわあああああああああ
っ……っ……」

少女は初めて。

大声で。

大声で泣いた。

泣いた。

「行こうぜ!!...ピリカ、シロ!!」

「おっ!!」

「...うん...うん!!」

—そうだ。

—きつと。

—ここから。

——ここからきつと始まった。

——ボクらの時間が。

第六章　何もできない。　（後書き）

やっと、スタートラインに立てた3人。

冒険はここから始まります。

どうか、これからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1871a/>

ボクらは友達

2010年10月9日18時26分発行